市の主要病院受診肺癌患者集計の結果でも，検診で発見される肺癌は全肺癌の10%程度であり，最近の検診発見肺癌の生存率向上が社会的にはほとんど貢献していないと考えられた．

3）胃集検高受診率地域の胃癌死の推移

中村　忠夫（小千谷総合病院内科）

魚沼地域胃集団検診協議会は小千谷市，十日町市，三魚沼郡，人口約23万人，40才以上約11万人を対象に行っている．受診者数は毎年3万人を越え，約24%と全国的に高い受診率の地域である．胃癌発見数も99人をピークに最近では70～80人で，発見率は約0.25%と高い発見率であり，精度管理の整った検診団体である．当協議会に属する守門村は人口約6千人の村であるが，毎年，2千人以上が受診しており，この村の胃癌死亡の推移について調べてみた．人口が少ないため変動が大きいが，比較的胃癌死亡は減少してきており，死亡者の多くは検診歴のない人達で占められていた．寝たきりの人や，精神科などに長期入院している人，村外の老人施設に入居している人など，検診を勧めることが出来ない人が多くいた．また，過去に見つけられた胃癌の人の中に十年以上長期生存している人は早期癌のみならず，進行癌でも集検発見に多いことが明らかであった．

追　加　発　言

三島町の胃癌死の実情

塚田　久子（三島町保健婦）

4）胃集検発見し手術拒否した胃癌の予後

原　　久弥（千葉県安房医師会）

安房医師会は安房医師会病院を検診機関として千葉県房総半島南部，安房11市町村40歳以上地域住民9万人を対象に，昭和43年より胃集検を行い，平成6年までで発見癌は706例になる．そのうち発見年度に手術を行わなかった症例は47例ある．それらの症例を追跡調査（追跡調査率100%）し，とくに手術拒否例について以下の結果を得た．

① 非手術例のうち手術拒否は15例（早10進5）

② 手術拒否例の生存期間：進行癌は短期間死亡例が多く，早期癌は長期生存が多い．他病死2例を除いた9例中，5年以上生存は5例，12年以上生存が2例．その1例は11年後 IIc が3型に進行しているのが確認されている．早期が進行して死亡したものは3年6カ月と9年後死亡（6年後胃切除）の2例．

③ 手術拒否例は5年までの生存率は良いが，それ以上では手術例と大きな差で生存率が低下している．つまり長期に生存するには早期の癌病巣の摘出が必要である．

特　別　講　演

「がん検診の問題点を考える」

慶應義塾大学放射線科学講師
近　藤　　誠 先生

第35回新潟画像医学研究会

日　時　平成8年6月8日（土）
午後3時～6時30分

会　場　新潟東映ホテル

演　題　1

1）海綿状血管腫と誤診した小さな神経膠腫の1例

古澤　哲哉・岡本浩一郎
酒井　邦夫　（新潟大学放射線科）
伊藤　寿介　（同　歯科放射線科）
熊谷　　孝・阿部　博史（同　　脳研究所）
田中　隆一　（脳神経外科）

症例は23歳の女性．突発する後頭部痛にて発症．発症当日の CT で，右海馬傍回から帯状回峡にかけ 1cm ほどの脳内出血を認め，右迂回槽にくも膜下出血を伴っていた．4日後の MRI T2 強調像では病変は低信号域から等信号域の辺縁部と高信号域の中心部として示現され，我々は海綿状血管腫と診断した．手術後の病理組織学的診断は anaplastic astrocytoma であった．Retrospective に読影すると，浮腫と考えられた T2 強調像での病変周囲の高信号域が造影されており，浮腫のみでなく腫瘍をも反映していたと思われる．腫瘍性の頭蓋内出血と非腫瘍性の頭蓋内出血は鑑別に苦慮することがあるが，一時点での画像診断のみで判断せずに follow す